

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00316

研究課題名(和文) 近世後期における地方歌壇の和歌文学研究 ―山形県庄内地方を中心に―

研究課題名(英文) A Study on "Shonai-kadan" in the late modern period

研究代表者

藤田 洋治 (Fujita, Yoji)

山形大学・地域教育文化学部・客員研究員

研究者番号：60165397

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世期の地方歌壇における和歌活動を明らかにすることが目的である。具体的には、出羽・庄内(山形県庄内地方)における近世後期の庄内歌壇の和歌活動を検討するものである。特に、庄内地方の歌壇は、江戸末期に和歌活動が盛んになったが、大きな特徴は、古典和歌の注釈作業を行っている点である。

『百人一首』の注釈書を白井固が『百首略解』として著し、その翻刻・考察を報告している。この度の研究では服部正樹の注釈、『古今老のすさび』・『後撰老のすさび』・『拾遺老のすさび』という三代集の和歌全てに詳細な注釈を施した注釈書が未紹介なので、『後撰老のすさび』の翻刻と考察を中心に研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の研究で、今まで未紹介の注釈書を紹介されたことが第一である。が、このところ研究が進んでいる近世期の地方歌壇を考えていくうえでも大切な業績となると思われる。

さらに、この度の研究で、出羽・庄内という、とりわけ江戸や京都からも遠い遠隔の地でも和歌文学が盛んになったということが明らかになっただけでなく、この地域の人々も京や江戸との繋がりが強かったことがわかった。例えば、『後撰老のすさび』などの注釈を著した服部正樹は、池田玄斎を師としているが、平田篤胤に師事して国学を学び、鈴木重胤にも師事して万葉集や古事記を学んでいる。地方歌壇と中央という区分以外の視点も必要になったと思われる。

研究成果の概要(英文)：

The purpose of this study is to clarify the waka activities of local waka poetic circles in the early modern period. Specifically, this study examines the waka activities of the Shonai waka circles in Dewa (Shonai region, Yamagata Prefecture) in the late modern period. In particular, the Shonai waka poetic circles in the Shonai region became active in the late Edo period, and a major characteristic of these waka poets is that they engaged in annotation work on classical waka poems. In this study, we report on the annotations of "Hyakunin Isshu" by Shirai Katashi in his "Hyakushu Ryakuge" (A Short Compilation of One Hundred Poems), as well as on the reprinting and discussion of the annotations. This study focuses on the reprinting and discussion of Hattori Masaki's commentary, "Kokin Oi no susabi," "Gosen Oi no susabi," and "Shui Oi no susabi," because these commentaries, which provide detailed annotations of all three collections of waka poems, have not yet been introduced.

研究分野：日本文学

キーワード：近世期地方歌壇 庄内歌壇 和歌注釈 古今和歌集 後撰和歌集 拾遺和歌集 百人一首 和歌文学

1. 研究開始当初の背景

和歌文学は、万葉の時代から続いてきた日本文学の一ジャンルである。が、地方における和歌文学となると、時代的に大きく下ることになる。戦国時代の連歌を中心とした地方進出もあるが、和歌を詠む文化となると、地方では大きく遅れていたと思われる。この度、江戸時代後期における出羽・庄内（山形県庄内地方）の和歌活動に着目したのは、ようやく江戸後期になって藩主・酒井忠徳が和歌創作を奨めたことに始まって、女流歌人・杉山廉を始めとして、白井固や池田玄斎、建部山比子など、多くの歌人たちを輩出する中で、庄内歌壇においては、古典和歌に注釈を加えるという作業が行われていたことがわかったからである。

そして、その注釈書も現存していて、全く研究の対象になっていないことが判明したために、その内容を明らかにし、庄内歌壇という歌壇の特徴を明らかにしたいと考えた。今まで学会にも全く知られていない注釈書が存在していたのである。注釈内容を研究し、地方における和歌研究の実態を明らかにすることができるはずであり、さらに、この研究を通じて、近年報告が続いている近世期の地方歌壇の研究にも寄与することができるはずである。近世期の和歌文学活動は、ほとんど着手されない時期もあり、地方における和歌活動は、ごく一部の地域に限られている現状に対し、新たな視点を加えることができ、近世期の和歌文学研究史にも新たな視点を加えられるからである。

2. 研究の目的

近世後期庄内歌壇の資料としては、個人の歌集もほとんど残っていないのが現状であるが、和歌の注釈書に関しては、服部正樹が三代集（古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集）の全ての和歌に詳細な注釈を加えた注釈書『古今老のすさび』・『後撰老のすさび』・『拾遺老のすさび』の三種の注釈書が鶴岡郷土資料館に所蔵されている。その注釈書の翻刻を通して、内容の分析と紹介をすることにより、中古和歌の研究史に加えることができること。また、注釈の内容を分析することによって、当時における和歌注釈の方法を明らかにできること、以上の二点である。特に、注釈において、先行する研究所をどのように利用しているのか、どのような内容を重視しているのか、どの注釈を重視しているのか、注釈本文を分析することによって、近世後期の歌人にとっての和歌文化、国学との関連が理解できるようにも思われる。

さらに、この注釈に先立つ注釈書として、白井固『百首略解』の存在も把握する必要があると判断して、これも研究対象とした。白井固は、近世後期庄内歌壇の中心人物であり、鶴岡で古今和歌集の講義を行っていたことも知られている。その講義の内容は、弟子の中村知至が天保14年に江戸において『古今和歌集遠鏡補正』として出版、題名からも推測できるように本居宣長の『古今和歌集遠鏡』の不足部分を補ったものであった。その白井固『百首略解』を翻刻・考察することによって、庄内歌壇における注釈方法の特徴や和歌への注釈態度などが明らかになると思われるのである。

3. 研究の方法

研究対象となるテキストを特定し、その内容を翻刻するというところから始まる。翻刻内容を確認し、注釈方法を分析するという方法を用いた。当初に予想していた通り、服部正樹の注釈書は、ほとんど流布しないまま現在に至っている。その大きな要因は、服部家では家宝のように大切に保管されていたため、誰もが閲覧するということができない状態だったこと、また、そのような古典和歌・平安和歌の注釈への関心も失われていた明治・大正という時代背景も大きかったと思われる。昭和16年に当時の鶴岡市立図書館に寄贈されて、初めてその注釈書の存在が公になるが、これらの注釈書の転写本は唯一『後撰老のすさび』を探せたにすぎない。『古今老のすさび』に至っては、五冊あるはずが、すでに一冊欠損し、全体を見るということができないという状態であった。

最初に、テキストの書誌を明らかにするところからスタートするのだが、『古今老のすさび』などは、子孫による寄贈であるだけでなく、服部正樹の筆跡と所蔵者である鶴岡郷土資料館が認定している上に、服部正樹自身の短冊や色紙も大量に残っており、自筆原本であることは、明らかであった。白井固の『百首略解』は、鶴岡市郷土資料館所蔵の伝本は、自筆であるものの草稿本であり、完成原稿は残念ながら自筆本では存在が認められない。しかし、自筆本を透写した昭和8年の写本が慶應義塾大学に所蔵されており、また江戸期の転写本も入手できたので、3本校合することで、より正確な本文で解釈することが可能となった。この『百首略解』には、自序があり、執筆の動機や目的も記されているため、その内容理解も、また注釈態度や注釈の特徴の把握も比較的容易であった。

4. 研究成果

研究の成果は、まず『百首略解』について、『山形大学紀要』にその全文を翻刻して「『百首略解』の翻刻と考察 - 近世後期庄内歌壇の側面 - 」という題で掲載した（2020年）。ただ紀要の枚数制限を超えてしまっていたために、改めてその内容を詳述したのが「白井固『百首略解』の注

釈方法」(2021年、『函館国語』)である。白井固は、当時の百人一首の注釈書に誤りが多いことに触れ、香川景樹『百首異見』がよりよい注釈書であることを認識した上で、その注釈をわかりやすくより短く纏めているが、全部を『百首異見』に拠るのではなく、自身の独自の解釈も加えている。近世期の百人一首注釈の主なものを取り込んだ注釈であった。

服部正樹の注釈作業については、『後撰老のすさび』が中心となった。『古今老のすさび』は、五冊あるはずが、四冊という現状であり、どうやら寄贈された段階から一冊欠損していたものと推定され、さらに古今和歌集の研究史の中で欠損した注釈書をあえて紹介するのは研究として意味がほとんどなさいと判断したために考察は後に回し、『後撰老のすさび』をまず取り上げたのである。最初に、「服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容 - 後撰和歌集注釈の新出資料 - 」という題で、和歌文学会12月例会(2020年)で発表し、『山形大学紀要』に「服部正樹『後撰老のすさび』の注釈方法」と題して掲載した(2021年)。また「忘れ去られた歌人 - 服部正樹と近世後期庄内歌壇の偉業 - 」という題で、『日本の歴史を問いかける - 山形県<庄内>からの挑戦』に掲載した(2021年)。ここで、服部正樹の注釈書がなぜ流布しなかったのかを中心に考察を加えた。さらに、「近世後期庄内歌壇における『後撰和歌集』注釈考 - 『後撰老のすさび』の慶長本注記を中心に - 」という題で、『山形大学紀要』に研究分担者・研究協力者とともに3名共著の形で発表した(2024年)。

『拾遺老のすさび』についても論考を発表するはずであったが、『後撰老のすさび』の内容を検討し、正確な翻刻をリサーチマップに掲載しようとして、目下校正作業の途上であり、今年度中に掲載して、研究者の批正を請いたいと思っているために、『拾遺老のすさび』の論考については発表は未定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤田洋治	4. 巻 171号
2. 論文標題 平安時代の柿本人麿	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 女子大國文（京都女子大学）	6. 最初と最後の頁 9-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田洋治	4. 巻 第三五号
2. 論文標題 白井固『百首略解』の注釈方法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 函館国語	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田洋治	4. 巻 第十九巻四号
2. 論文標題 服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山形大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田洋治	4. 巻 3巻
2. 論文標題 忘れ去られた歌人 - 服部正樹と近世後期庄内歌壇の偉業 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本の歴史を問いかける - 山形県<庄内>からの挑戦	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田洋治	4. 巻 第19巻3号
2. 論文標題 『百首略解』の翻刻と考察 - 近世後期庄内歌壇の側面 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山形大学紀要(人文科学)	6. 最初と最後の頁 23, 61
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 洋治	4. 巻 第19巻
2. 論文標題 『百首略解』の翻刻と考察 - 近世後期庄内歌壇の側面 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山形大学紀要(人文科学)	6. 最初と最後の頁 23, 61
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 藤田洋治 河井謙治 古田正幸
2. 発表標題 服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容 後撰和歌集注釈の新出資料
3. 学会等名 和歌文学会12月例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古田 正幸 (Furuta Masayuki) (10644635)	大正大学・文学部・准教授 (32635)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------